

# 自閉スペクトラム症児者の心の理解



## ●強度行動障害

自閉スペクトラム症や重度の知的障害のある方の方なかで、激しい問題行動を頻発する人がいます。近年、強度行動障害としてその研修が行われています。そこでは問題となる「行動」をどう変えるかが中心となり、それを行っている障害のある当事者の思い（心）がなおざりにされている印象は否めません。実際には本人の思いとは関係なく、生理的に突き動かされるように問題行動を起こす場合もあります。また、関わる側が相手の思いを考慮する余裕がなくなるほど精神的に追い詰められることも少なくありません。しかし、強度行動障害を行っているのも人間です。いろいろな思いを抱えながら、問題とみえる行動をせざるをえない状況に追い込まれている人はいるはずです。そういつたことを深く考えさせてくれるみぬま福祉会の実践に出会いました。この実践を取り上げながら、その人の心を考えてみたいと思います。

## ●「政臣が壊れた」——出口のない迷路

これは成人施設に入っておられる政臣さんのお母さんの言われた言葉です。政臣さんはそのころ、問題行動の嵐の中にいました。水中毒（後でふれます）、睡眠の乱れ、大声、二階から突発的に飛び降り脚の骨を折る、仲間への他害行動などです。しかし、施設入所当初彼は、人に対してオドオドし、近くに誰かが来るだけで逃げてしまふ、「手のかからない」人でした。そんな彼が、右のような状態に変わったのです。

脚を骨折した後も突発的に飛び出ようとするとする彼に、職員は24時間体制で連日つきそいます。なにかしなければ、でもどうしていいかわからず、結局政臣さんを止めることしかできない。職員は「出口のない迷路に迷い込

んだ」感覚と書かれています。これは、強度行動障害のある人に関わる側が感じる切実な思いだと思います。

## ●本当の気持ちを知りたい

問題行動の嵐になる前、政臣さんには、父の死、家の引っ越しという出来事がありました。自閉スペクトラム症の「変化が苦手」という障害特性からすれば、この大きな変化が問題行動の原因と考えることは可能です。そのため、毎日同じ場所で・同じ時間に・同じ仕事がある変化のない環境が重視されたりします。加えて、環境のなかで一番変化をもたらしやすいのは「人」の存在です。人は、状況や気分で表情、態度、言葉かけなどを臨機応変に変化させるからです。そのためもともと変化のない環境は「人ができる限り関わらない」環境（個別の空間、決まった順番で進む活動、人が笑顔でほめるのではなく、シールを貼ることで評価を伝えるなど）となるのです。

この実践でも、父の死、家の転居は大きな意味があったと考えます。しかし、それを「変化が苦手」という障害特性のレベルの理解でとどめません。この変化は、政臣さんにとって自らの存在すら脅かすほどの「不安」を与えたととらえるのです。激しい「不安」という心の理解は、彼の発達課題をとらえるときりくみから生まれていきます。これは職員が「出口のない迷路に迷い込んだ」と思うほど追い詰められながらも、この激しい問題行動のなかにこそ彼の本当の気持ちがあると考え、必死で探ろうとしたなかでのとりくみでした。

新版K式発達検査の結果、政臣さんは一歳半の発達の節の少し前にいることがわかりました。この時期は、初語の獲得や言葉の理解の始まりにあるように、相手の言うことがただの「音」ではなく、「意味のある言葉」であることに気づき始めます。しかし、自分が理解できる言葉はまだわずか。一方、言葉がただの音ではないと理解で

## 第11回 激しい問題行動を考える

### 別府 哲 (岐阜大学)

べつぷ さとし/岐阜大学教授。自閉症児・者の発達や指導をライフサイクルを通して研究。著書に『自閉症児者の発達と生活ー共感的自己肯定感を育むために』『障害児の内面世界をさぐる』（以上、全障研出版部）など。現在、全国障害者問題研究会常任全国委員。

